

三熊野詣

三熊野詣

新潮社



三熊野詣

昭和四十年七月三十日 発行

昭和四十六年四月二十日 五刷

著者 三島由紀夫

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一

電話東京(三六)一一二一

振替 東京 〆

印刷 大日本印刷株式會社

製本 新宿 加藤製本所

定價五〇〇圓

© by Yukio Mishima. 1965. Printed in Japan.

風丁、落丁本はお取替へ致します

目次

三熊野詣	五
月澹莊綺譚	五
孔雀	一三
朝の純愛	一七
あとがき	二〇

装幀

箱

紅白段市松御所車唐織

(觀世宗家所藏)

見返

紅淺黃段龜甲籬小菊模様唐織

(觀世宗家所藏)

これらの唐織は『熊野』のシテの装束にも使用されている
不許可轉寫複製

三
熊
野
詣

三
熊
野
詣

第一

常子^{つねこ}は藤宮^{ふぢみや}先生から熊野の旅のお伴を仰せつかつたとき、しんからおどろいた。

十年にわたつて身邊の面倒を見てもらつた、その禮をしたいといふ思召しなのである。常子は四十五歳になる身寄りのない寡婦で、歌のお弟子として入門しつつ、折から手傳ひの老婆を失つて困つてをられた先生のお世話をするやうになつたのであるが、この十年間、ただの一度も色めいたことはない。

常子はもととも美しい女でもなし、色氣のある女でもない。實に地味な性格で、すべてに控へ目で、かりにも自分からかれこれのことをしてくれと人に要求できるやうな人柄ではない。結婚二年目に急死した良人とも、親類が強ひて

妻はせた縁であつて、好きで一緒になつたのではない。そんな女が歌を作るやうになつたのはふしぎなことだが、先生はさういふ常子の人柄と、才能のなさとをよく見きはめた上で、家へ入れる決心をされたらしいのである。

しかし根本の動機はあくまで常子の側の尊敬心にあり、藤宮先生ほどその尊敬の対象としてふさはしい人物はなかつた。

藤宮先生は清明大學の國文科の主任教授で、文學博士で、また歌人としても知られてゐた。先生の古今傳授の研究は有名だつたが、その研究の特色は、王朝文化の名残が、次第に空疎に形式化してゆきながら、民間信仰とまざり合つて神祕の色を増し、徳川時代にいたつて、神儒佛説混入のふしぎな傳授書まで生みだすにいたる徑路の、貴族的な文化と民衆的な文化との、微妙な融け合ひの解明にあつた。この研究は、最近十年は、源語傳授の研究に引きつがれ、王朝文學の先生の講義は、ともすると逸脱して、この神祕な傳授の中世的な色調に染められるのであつた。

先生の學問の、科學的實證性や、體系的完成とは別に、まづ何よりも先生は

詩人なのであり、先生を魅するものは神祕であつた。

例の御所傳授の有名な「三鳥の大事」でも、稻負鳥いなおふせどり、ももちどり、喚子鳥よこどり、といふ三種の鳥は、動物園へ行つても見つからない無形の鳥であるが、それぞれ天地の原理をあらはして、象徴的神祕的な意味を荷つてゐるのを、先生は、世阿彌の花傳書の花と對照させて、もつとも世にひろく讀まれた、あの散文詩のやうに美しい「花と鳥」といふ著書に作りあげた。これは又、先生の歌集である、「花鳥集」の題名のもとになつてゐる。

先生のまはりには崇拜者たちが群れつどひ、その人たちにとつては先生は絶對の神で、誰か競争者が先生の寵を奪ひはせぬかとお互ひに目を光らせてゐるので、公平を保つための先生の御苦心も、並大抵のものではなかつた。

かう言ふと、先生は世間的にも人間的にも光り輝く存在のやうに思はれるが、先生に親しく接した人間の目から見ると、こんなに影に包まれた淋しい異様な人もなかつた。

第一、先生はきはめて風采が上らず、子供のときの怪我から眇すかめになり、その

負^ひけ目もあつて、暗い陰濕な人柄であつた。ときには親しい者には冗談も言ひ、病身の子供が急にはしやぎだしたやうに、とめどもない快活さを示すこともあつたが、それは決して外觀の陰濕さを覆ふにいたらず、どこまでも自分の柄を知つてその限界に耐へてゐる人の、身體不相應に大きい翼のやうな、自意識の影をはみだすにいたらなかつた。

先生は奇異な高いソプラノの聲を持つてゐた。激したときには、それは金屬的な響きにさへなつた。どんなに身近に仕へる者も、先生がいつ怒り出すか、前以て知ることとはできない。講義のあひだに、何か理由もわからずに退場を命ぜられる學生が時折ある。よく考へてみると、その日赤いスウェータを着てゐたことが理由であつたり、鉛筆で頭を搔いて雲脂を落してゐたことが理由であつたりする。

先生のなかには、甘い、やさしい、弱い、子供らしい部分が、六十歳の今日にいたるまで残つてゐた。それがいつも人の敬意を失はせるたねとなることを怖れてゐたから、學生たちには禮儀作法をやかましく言つた。實際、先生の業

續に少しも興味を持たぬ他學部の學生などは、かげで先生のことを、「化け先」と嘲つてゐたのである。

近代的な清明大學の明るい校庭を、先生が數人の弟子を連れて横切られる光景は、大學の名物になるほどに異彩を放つた。先生は薄い藤いろの色眼鏡で、身につかぬ古くさい背廣を召して、風に吹かれる柳のやうな力のない歩き方で歩かれる。肩はひどい撫で肩で、ズボンはまだで袴のやうに幅廣く、髪はそのくせ眞黒に染めてゐるのを、不自然にきれいに撫でつけてゐる。うしろから先生の鞆を捧げて歩く學生も、どうせ反時代的な學生だから、この大學ではみんなのきらふ黒い詰襟の制服を着て、不吉な鴉の群のやうにつき従つてゆく。先生のまはりでは、重病人の病室のやうに、大きな快活な聲を立てることができない。話を交はすにしてもひそひそ聲で、それを見ると、遠くから、「又葬式がとほる」とみんなが面白がつて見るのである。

アメリカン・フットボールの練習などの傍らをとほるとき、

「めりけんの『汚れ蹴鞠』の目永かな、つて富坂君が駄句を作りましたよ」

「そりやいけない。句のよしあしよりも、私に使用料を拂ひなさい。その上で句の批評をしてあげる」

などと先生が機嫌よく言はれる。それは師弟の幸福なひとときであるけれど、「汚れ蹴鞠」といふのは、先生が先頃フットボールを諷刺的に詠じた歌のなかの新造語であり、その新造語を弟子が盗んだことを、冗談のたねにしたのである。この種の冗談には、仔犬が親犬にじやれつくやうな、微妙な阿諛がまじつてゐる。第一、先生の學生であるためには、この種の冗談が心から可笑しくなくてはいけないのだ。

そのとき鴉の一群からは、軽い、春の埃のやうな笑ひ聲が舞ひ上る。しかし先生はめつたに聲に出して笑はれることはない。笑ひ聲はやがて靜まる。遠くから見ると、それは尊敬に充ちた暗い祕儀的な一團が、いつとき、感情の規矩をちらりと亂して、亂すことによつて、人にはわからぬ自分たちの紐帶を、一そう固めるための不氣味な戯れの儀式を演じたやうに見える。……

先生の心にひそむ悲しみと孤獨の澱みは、時折の作歌には逆り出たけれど

も、ふだんは水族館の岩かげに隠れる奇怪な魚のやうに、硝子を隔ててわづかに窺ふばかりはなかつた。何が先生をそのやうに、自分だけのものうい悲しみの喪にとちこめてゐるのかわからなかつたし、又、強ひてわからうとしない人たちだけが、先生と永い交際を保つことができた。

ごく親しい弟子には、先生自ら、さういふ「ふさぎの蟲」について講釋をされることがあつた。

「ロバート・バートンの古典的な學說によると、人間の體液には、血液と痰と膽汁と憂鬱液の四種類があつて、そのうち憂鬱液は、冷たい濃い黒い酸味のあつた汁で、脾臓から出るもので、その役目は、血液や膽汁を統御するほかに、骨に滋養分を與へるのやさうです。憂鬱症の原因には、精靈、惡靈、天體などの影響があげられる。また食物では、牛肉が憂鬱液の發生を促すさうだが、私はごらんのとおり牛肉好きだ。その上、バートンが言ふには、學者といふ職業はもつとも不安定で、すぐれた學者となつてあらゆる知識を得ようとすれば、健康、富、生命を失ふにいたる。従つてもつとも憂鬱症に襲はれやすい。私がこ

れだけの條件が整つて、ふさぎの蟲にとりつかれなんだら、むしろふしぎなことです」

聽手は一體こんな話をまじめにとつてよいのかどうか困惑させられる。そんなことを言はれるときの先生が上機嫌であることはわかつてゐるのである。

別に、嫉妬も先生の主要な特質であつた。先生はいつも若さの友であつたが、自宅の特別講義の會に列席をゆるされてゐたおひいきの學生が、あるとき酒場のマダムにもてた話を大聲でしてゐたのを洩れ聽かれ、不謹慎を理由に破門された。先生は殊に自宅の講習會には、たとへば神道の沙庭（さには）のやうな、神おろしにふさはしい清淨な若さが立ちこめることを望まれた。ポマードの匂ひも、汚れた肌着の匂ひもゆるされず、新鮮な檜の削りたての板のやうな、明るいさわやかな青春の氣、かがやく瞳、若々しい清らかな熱意のある聲が、先生の自宅の陰濕な十二疊の座敷を充たすことを願はれたのだ。

進んで攻めるのは不得手であつても、退ひいて守ることにかけてはしぶとい先生は、學問の操を守るにつけて、戦争中も何一つ汚點を残されなかつた。これ